
僕が息子に言えること

キング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が息子に言えること

【コード】

N7400A

【作者名】 キング

【あらすじ】

雨の降りしきる車内で、僕と敬一は話していた。

「パパ」

「なんだ」

「今日ね、里見ちゃんに愛してるって言られたの、それからね昨日は千賀子ちゃんに好きって言られたの」

夏の雨降る蒸し暑い車内で、クーラーの音と雨が車のあちこちを叩く音に混じって僕らは会話していた。

「それで？」

「それでね、僕里見ちゃんや千賀子ちゃんが何言つてるのか分からなくて黙つてたら笑われたの。パパ聞いてる？」

「ああ、聞いてるよ。それで続きは？」

「好きとか愛してるつていつたいなんなの？」

いつも保育園が終わって迎えに行つた帰りは、よく敬一の質問攻めにあつ。

「好きつてことはな、簡単に言つとその千賀子ちゃんが敬一に恋をしてるつてことだ。わかるか？」

「うーん」

「それから、愛してるつてのはそのまま愛つて」とだ。わかるか？「わかんない」

無理もない敬一はまだ保育園の年長さんだ。

「んー、じゃあまず恋から説明しよう。恋つてのは奪い合つ行為のことだ。お前がいつも読んでるピノキオの絵本が誰かに取られたら

敬一はどうする？」

「とりかえす」

「そうか、恋つていうのはそういう心の奪い合いなんだ。好きな異性の心が欲しくて奪いたいと思う、好きな異性に心を奪われる。奪うとか奪われるとかの暴力的な響きの行為を繰り返し行うんだ。だから人は恋やなんぞで傷付いた、傷付けられたとわめくんだ。わか

るか？」

「さつきより」

「うん、良かった。じゃあ次は愛だ。愛つていうのは、急に風景が霞んできた、雨が激しくなったと最初思つたが、あいつの顔が頭に浮かんできた。息子の前で泣くのは親としての恥と思い、唇をぎゅっと噛み締めた。

「パパ? どうしたの?」

「いついや、なんでもないんだ」

「パパ、続きをなしてよ」

「そうだつたな。なんの話をしていたんだっけ」

「いやだなあ、忘れちゃつたの?」

純粋な敬一の微笑みが僕の胸をさらに苦しませた。

「ああ、思い出した。愛のことだつたな」

幾分か落ち着いてきた。

「うん。そうだよ、よく思い出したね」

「愛つていうのは、与え合う行為のことだ。もし敬一が僕に僕の一番大切なものをもらつたらどうする?」

「僕の大事なものもあげる」

「そうか、それが愛だ。大切な人に大切なものを与え、与えられる涙がとめどもなく流れてきてどうしようもなくなつた。

「けどな、敬一。恋とはなにか愛とはなにか、この質問を百人にして、一つも同じ答えはかえつてこない。なぜならその人がした恋や愛がその答えになるんだ」

「パパ、どうして泣いてるの?」

信号が赤になつて僕は車を止めた、そしてあいだ手で顔を覆つた。

「ごめんな敬一。お前にもつと良い答えを返してやりたかった、けど今の僕じゃだめだ。本当にごめんな、お前に子供が出来て、同じ質問をされたときは、もつと素晴らしい答えを返せるようになつてほしい」

「パパ、パパ、ママはどこにいるの?」

「「」めさん、敬一「」めんめ
「まあほほほほほほほほほほほほほほ
「ママほほほほほほほほほほほほほほほほ
うなだれた僕とまっすぐに聞く敬一とを乗せた車の中には、クーラ
ーと雨の音しかしなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7400a/>

僕が息子に言えること

2011年1月27日05時27分発行